書　評

王興中ほか『中国城市社会空間結構研究』
(『中国都市の社会空間構造の研究』)

科学出版社　北京　2000年　215p.

本書は，陝西省西安市を事例として，土地利用分析や行動地理学の研究手法を用いて，中国内陸都市の空間構造について論じた好著である。西安外語学院人文地理学研究所・副所長の王興中を中心として，計９名により執筆されている。構成は4部・16章からなり，中国の大学等で教科書としても使用できるような体裁がとられている一方で，１次資料が豊富に掲載され，かつ多くの興味深い指摘がなされており，研究書として十分に通用する内容である。特に西部大開発政策の開始以降，中国内外で注目を集めつつある中国内陸地域であるが，その都市の空間構造や住民の生活行動に関して，これまで書籍としてまとまって発表された研究は少なく，その意味でも本書は貴重である。

第１部「中国都市の社会空間のマクロな形態と構造」では，西安における都市圏の境界設定や内部地区の類型区分がなされ，区分されたそれぞれの類型地区の特徴が説明されている。そして，建築物や土地利用などの形態と居住者特性の分析をとおして，西安の内部空間構造が同心円と扇形の組み合わせからなっていることが示されている。柴 (1999) などにおいても論じられているように，中国の都市においては，就業や住居の場，および文教・福利施設をあわせ備えた「単位」(danwei) の制度が，空間構造や住民の居住形態に大きな影響を与えている。本書においても，この単位制度によって中国都市の空間構造が特徴づけられていることが説明されている。

第２部「中国都市の社会空間のミクロな形態と構造」においては，住民の日常生活と空間認知の分析にもとづいて，住民の生活行動と都市の社会空間構造との関係が解説されている。特に，このなかの第8章「都市社会地域の近隣住区の認識と作用」においては，西安のインナーシティ，郊外文教地区，繊維工業地区のそれぞれの住民の生活行動に関する調査の結果が示されており，注目に値する。それによると，一般的には，住民の通勤・購買などの日常生活は，0.1～1.0kmの範囲内で完結していて，その要因は職住近接の単位制度にあるそうである。また，居住地や勤務地周辺における住民の空間認知においても，単位の規模や性格によって差異が生じているとのことである。

第３部「都市の空間形態と社会空間の相互作用」では，土地利用変化とは「権力と社会的要素が空間上において衝突している過程」(p.141) であるという認識に立ち，都市の土地利用形態の維持・変容をめぐる権力関係，および住民の空間認知や移住の状況について論じられている。

このなかで，第10章「都市社会組織と都市空間の相互作用の規則性」においては，これまで中国の地理学的研究ではあまり触れられてこなかった，職業・年齢・性別など，住民の属性別の生活圏や社会的ネットワークの特徴が説明されていて興味深い。ただし，それらが空間的にどのように展開されているのかについては，十分には議論されていない。

第11章「都市の土地利用変化と都市に内在する社会権力要素との関係のメカニズム」では，都市マネジャリズム論が援用され，ゲートキーパーである土地開発産業や金融機関による不動産開発の状況が説明されている。そして，中国の都市においては，行政が使用権を有する土地の面積が広く，政府の指導のもとに大部分の開発事業が行われていること，および各単位の事務用または労働者の住宅用として建築物の大部分が建設され，単位自身が不動産部門を設置して開発事業に取り組んでいることが指摘されている。さらに，第12章「都市の土地利用変化と

空間的抵抗力の関係のメカニズム」では，政府指導者，都市計画部門，土地管理部門などの省・市行政の各部門，居民委員会や街道辦事処などの末端の行政組織，各単位，および住民や住民組織が，都市の土地利用変化に対してそれぞれどのような役割を果たしているのかが分析されている。このなかに，現状維持を望む単位が，行政の再開発事業を阻止することがあると説明されており，興味深い。このように，地域住民もさることながら，単位が土地利用変化への強い抵抗力となる場合があるということは，中国における特徴といえるだろう。大規模な開発が続く中国都市の様子は日本においてもよく紹介されるが，各機関や単位，住民との間の，都市開発をめぐる複雑な交渉や闘争については，これまでほとんど研究されていない。具体的な事例の記述が少なく，モデル化が先行しているという問題点はあるものの，これまで表面的な紹介が多かった中国の都市開発をめぐる複雑な権力関係について，本書からその一端を理解することができるだろう。

また，第14章「都市居住者の流動と社会空間の関係性」では，中国の住宅市場の成熟や住民の階層分化も考慮されて，住民の移住の動向と都市の空間構造との関係が議論されている。人口の流動量が増加している中国においては，本章のテーマも重要な研究課題のひとつである。本章では，住民の職業や生活様式に応じて住居地移動の形態には差異があるが，大部分の住民は，主に単位内で分配された住宅の間を移動するため，移動距離は500m以内の場合が多いという調査結果が紹介されている。この点からも，中国都市の空間構造や住民の生活行動に与える単位制度の影響力の大きさが理解できる。

第4部「中国都市の生活空間の評価」では，統計資料と住民の住環境評価のデータを用いて，都市の社会問題および住民の生活の質の空間的差異が分析され，さらに，都市におけるすみやすさとはどういうことなのかが議論されている。そのなかで，鉄道駅や長距離バス・ターミナルの周辺，および都市と農村の接合地域など，外来人口の比率が高い地域は，犯罪率も高い傾向にあり，すみにくい地域であると住民に認識されているという指摘がある。顧ほか(1999) においても論じられているように，このような，外部地域からの「流動人口」の増加にともなう都市空間の変容というものは，現在，中国の多くの都市で見られるようになってきており，内陸部の都市においてもそれが例外ではないことが本書からうかがえる。ただ，本書では，主に元から居住している住民への調査にもとづいて考察がなされており，新しく移住してきた人々の生活状況やコミュニティの実態については検討されておらず，今後の研究が待たれるところである。

全体的には，中国の内陸都市の空間構造と住民の生活行動や空間認知について，本書では，行政諸機関や住民の間の権力関係をも考慮に入れて議論が展開されている点が評価できる。主に参照されている欧米の文献が，Ley (1983)，Walmsey and Lews (1984) などの1980年代のもので，最新の研究成果が取り入れられていない部分があり，さらに一部の調査資料の出所が不明な点はあるが，中国ではこの分野の研究蓄積が少ないことを考えると，本書は貴重な研究成果といえるだろう。

また，西安都市圏のみを調査地域としていることが本書の限界という意見もあるかもしれないが，むしろそのことによって各研究項目についての深い議論が展開できている点を評価するべきだと評者は考える。確かに，中国全体における西安都市圏の位置づけや調査地域の概要についての説明が少ないため，西安を訪問したことのない読者にとっては理解しにくい部分があることは本書の難点である。しかし，中国の諸都市についての表面的な説明のみしか行われていない文献が多いなかで，１次資料にもとづいた詳細な分析が行われている本書は，中国の土地利用，都市計画，住民行動，空間認知などに興味を持つ者にとって，大いに参考になる書籍であると総括できる。

加えて，本書での議論を発展的に検討するならば，以下の２点について，今後さらなる研究の進展の余地があると考えられる。

１つ目は，中国都市の空間構造や住民の生活行動に大きな影響をおよぼしている単位の土地

利用や住居管理の制度についてのより具体的な研究である。中国内陸部の都市においても，単位制度によって土地利用や住民行動が大きく規定されているということが，本書から理解できる。今後は，柴（1999）も議論を行っているような，個々の単位の規模や性格に応じて土地利用形態や住民の生活行動にどのような差異が存在するのかということや，現在進行中の国有・国営単位の解体にともなって，都市空間や人々の生活にどのような変化が生じているのかということを検討していく必要があるだろう。社会学などの研究分野では，単位制度に焦点を当てた研究が増えつつあるが，単位と都市の空間構造との関係についてはあまり議論されていない。空間研究に蓄積のある地理学からのアプローチが有効性を発揮できるはずである。

２つ目は，評者が中国の「少数民族」に特に興味を持っているためという理由もあるのだが，本書の各所で，主に西安のインナーシティに居住している中国人ムスリム・回族の地域社会についての言及が見られるにもかかわらず，その詳細が検討されていない点は物足りないように感じられる。本書が中国内陸部の一都市を事例地域としていること，および中国の少数民族が主に内陸部に居住していることから考え合わせると，民族集団の文化的要素が都市の空間構造や住民の生活行動にどのような影響を与えているのかについて，より詳細な研究が行われるべきであろう。例えば，Gillette（2000）は，西安の回族コミュニティを事例として，旧市街地の空間構造と住民の生活様式や価値観の変容についての興味深い研究を行っており，また，王（2001）は，内モンゴルのフフホト市を事例として，都市の形成過程と各民族集団の居住形態や社会関係との関係について論じている。このような，現在は主に文化人類学の研究分野で行われている民族集団の文化的要素についての研究と，本書による土地利用研究とを併用することによって，中国の都市や人々について，より深い理解を得ることが可能となるだろう。

文　献

顧　朝林ほか 1999.『中国城市地理』. 北京：商務印書館（書評は拙稿，高橋2001，駒澤地理37: 95-97を参照）.

王　俊敏 2001.『青城民族―一箇辺疆城市民族関係的歴史演変―』. 天津：天津人民出版社.

柴　彦威 1999.『日中城市結構比較研究』. 北京：北京大学出版社.

Gillette M. B. 2000. Between Mecca and Beijing: Modernization and consumption among urban chinese muslims. Stanford, California : Stanford University Press.

Ley D. 1983. A social geography of the city. New York : Harper & Row.

Walmsley D. J. and Lewis G. J. 1984. Human Geography : Behavioural Approaches. Harlow : Longman.

（高橋健太郎）

R.Pain, M.Barke, D.Fuller, J.Gough, R.MacFarlane, G.Mowl：Introducing of Social Geographies

（R.ペイン，M.バーク，D.フラー，J.ゴフ，R.マクファーレイン，G.モウル共著：社会地理学入門）

Arnold, London, 2001,308p.

本書はイギリスにおける社会地理学入門の書として，R.ペインを始めとするイギリスの地理学者計６名の執筆者が，それぞれの社会地理学における哲学を持って書かれた新著である。本書の位置づけは，第１章の導入部で概説しているように，学部生向きのものであること，そしてこの書を読んで社会地理学を学ぶ諸学生に向けて自らの「ポジショナリティ」に気づかせ，